

覚々斎原叟の書

北大路魯山人

青空文庫

これは旨い字か、拙い字か、おとなか、子どもか、手の字か、心の字か、はた人格の賜たま物か、それとも、学者の書か、高僧の筆か、あるいは書家の字か……。書家なら、もつと字をうまくまとめるはず、第一こんな風格の高い字は書けない。学者の字としては、並々尋常の学者では書けない自由さがある。坊さんの筆としては、いわゆる坊主臭さがない。俳人にしては、たいてい、この真面目さを見ることはできない。

ほかでもない、これこそ、われらの誇る日本人の見識をもって生まれ出でたる茶道茶儀、この道の悟りに因つて、世に表われた書である。旨い字か、否いな、拙い字か、否、ただ、よい字である。よい字というものは、よい人格が生む以外、ほかに生んでくれる母体はない。人格の善悪上下は、大部分が生まれつきであり、天の成しあずかるところであるが、善智を心がける教養も決して軽く見ることはできない。

世に能書はたくさんあつても、善書は稀にしか見当らない。能書はややもすると、技術を得意とする悪弊に陥り、由来価値を認めがたき、書家の書に成りたがるものである。善書は質が善を備えておるから、どう間違つても善書は善書であつて、低劣の醜悪とはなんら関係がない。

今は茶道の中、点茶の形式が辛うじてその面影を残しておるが、肝腎かなめの善知識を得るところの根源とも申すべきまごころが、ほとんど跡を絶ってしまった。真剣が影を薄くしたこの書は、必ずしも、茶家一流格の墨蹟ではないが、今の世に、せめてこれくらい
の字ができる人格者が茶道界に現われると、茶儀に対する誤解もなくなり、国粹というよ
うなことも鮮明になり、殊に審美上のことなどは、如何に有益に進展するかを思わずには
いられない。

とにかく、茶道に入ると、入ること深ければ深いに随い、ものの見方が精密になる。従
つて、表面のみに陶醉するような杜撰ずさんから救われるようだ。この筆者は茶道第一の名家、
千利休を相承する表千家三代 覺々齋原叟かくかくさいげんそうである。

今を距る二百二年前、享保十五年六月二十五日、五十三歳で永眠している。この墨蹟を
按ずるに、おそらく晩年の作であると思われる。
(昭和六年)

青空文庫情報

底本：「魯山人書論」中公文庫、中央公論社

1996（平成8）年9月18日初版発行

2007（平成19）年9月25日3刷発行

底本の親本：「魯山人書論」五月書房

1980（昭和55）年5月

入力：門田裕志

校正：きゆうり

2019年3月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

覚々齋原叟の書

北大路魯山人

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>